

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 21 日現在

機関番号：15401

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2017

課題番号：15K13231

研究課題名(和文)教科の基盤となる資質能力を育成するための幼小接続期教育に関する研究

研究課題名(英文)Transitional education from kindergartens to primary schools for improvement of qualities and abilities leading to a foundation of subjects

研究代表者

三村 真弓(MIMURA, Mayumi)

広島大学・教育学研究科・教授

研究者番号：00372764

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、教科の基盤となる資質・能力とは何かを探究し、それらを幼小接続期教育において育成するためのカリキュラム及び指導法を構築することを目的とした。

幼稚園教育課程における各領域の活動の分析を通して、各教科の基盤となる資質・能力との関連を検討し、幼小接続カリキュラムを作成した。また、幼稚園・小学校の教諭による相互の活動・授業観察と協議、及び乗り入れ活動・授業を行うことによって、幼小接続の指導に必要な要件を見いだした。

その結果、幼小接続に必要なものは異校種の教諭の意識改革であることがわかり、接続の根幹にあるのは遊びに向かう力・学びに向かう力であることが明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to reveal qualities and abilities leading to foundations of subjects and establish a curriculum and methods to develop them in transitional education from kindergartens to elementary schools. We designed the transitional curriculum through exploring qualities and abilities leading to foundations of subjects and considering relation of each area in the Japanese national curriculum, the Course of study for kindergarten, on its analysis. Further, we derived requirements from interactive observations of activities/teachings, its discussions and mutual entry activity and teaching.

As a result, we found that the requirement for the transition is awareness reform among different kinds of schools' teachers and the stem of the transition is power directed toward playing and power directed toward learning.

研究分野：音楽教育学

キーワード：幼小接続カリキュラム 資質・能力

1. 研究開始当初の背景

昨今では、小中連携や小中一貫教育の様々な試みが全国各地で行われている。それらの目的は多様であるが、大きく2つに分けられる。第1の目的は、不登校等の生徒指導上の諸問題（いわゆる中1ギャップ）の解決である。これに関してはかなりの成果が認められている。不登校出現率の減少のみならず、児童生徒の規範意識の向上、自尊感情の高まり等が報告されている。第2の目的は、小中連携による教科の学力向上である。これに関しては、小中一貫カリキュラムの作成、小・中学校教員の乗り入れ指導の実施等が試みられている。研究代表者は、これまで様々な小中連携の学校を視察してきた。また、広島県府中市の小中一貫カリキュラムにもここ数年関わってきた。その結果、小中一貫カリキュラムは教科内容を系統的に並べたものが多く（府中市教育委員会、2008、2013）、乗り入れ指導にも様々な課題が存在することがわかった。これらのことから、異校種を繋ぐ一貫カリキュラムにおいては、教科内容を並べるのではなく、教科の基盤となる何かを系統的に育成することが必要ではないかと考えた。

一方、研究代表者・連携研究者たちは、各教科（校種別）の授業研究を行った結果、各教科として根本的に獲得させたい力「教科内容・教材を対象として働く力」があることがわかった（三村・大後戸・中村ら、2012）。各教科にはほぼ共通することは、教材に秘められた教科内容を何らかの形で受容し、それを自分のなかで咀嚼し、さらに外へと発信するという力である。その後の検討から、「教科特有の視点や感性」といったものも、教科内容の獲得や質の高い学習活動には必要であることがわかった。そこで本研究では、これらのものを、各教科の基盤となる資質・能力と定義する。これらの資質・能力の芽生えは、幼児期の教育の各領域の活動のなかに散在していると考えられ、これを整理し、系統立てることによって、幼児期の教育の領域を小学校の教科へと繋ぐ、幼小接続期のカリキュラムの構築が可能になるといえる。

文科省は、昨今、幼小連携の必要性を示し、幼小接続期教育の充実を示唆した。「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続のあり方に関する調査研究協力者会議」は、幼小の教育の目標を「学びの基礎力の育成」という1つのつながりとして捉えることの必要性を説いている（2010.11.11）。そこで本研究では、「学びの基礎力」を学習に取り組むために必要な力と捉え、「キャリアプランニング能力」「人間関係形成・社会形成能力」「課題対応能力」を通教的に学びの基盤となる資質・能力とみなして、幼小接続期の教育に関する研究を行うこととした。

2. 研究の目的

本研究は、教科の基盤となる資質・能力と

は何かを探究し、それらを幼小接続期教育において育成するためのカリキュラム及び指導方法を構築することを目的とする。

3. 研究の方法

幼小接続カリキュラム作成と指導法の開発にあたり、要件を明らかにする。まず、各教科の基盤となる資質・能力を、各教科の教科内容・学習活動の分析を通して明らかにする。それらを踏まえ、幼児期の教育課程における各領域の活動の分析を通して、各教科の基盤となる資質・能力との関連を比較検討し、領域と教科の接続の可能性を探る。以上を基盤として、5歳児と小学校1年生を対象とした幼小接続カリキュラムを作成し、実践する。また、学びの基盤となる通教的な能力「キャリアプランニング能力」「人間関係形成・社会形成能力」「課題対応能力」を幼小接続期においてどのように培っていくのかを実践から明らかにする。

さらに、教科の基盤となる資質・能力の育成の在り方の一例として音楽教育を取り上げ、幼小接続を意識した音楽活動・音楽授業の研究を行う。

本研究は、研究代表者の三村が校長として教育研究に関わっている広島大学附属三原幼稚園・小学校を対象として実施する。

4. 研究成果

幼小接続カリキュラム作成と指導法の要件を明らかにするために、以下を行った。まず、幼稚園教諭と小学校教諭の相互参観及び協議を行った。これを踏まえ、小学校教諭による保育参加としてコーナー遊び（図画工作科教諭による土粘土遊び、音楽科教諭による音遊び、生活科教諭による転がし遊び）を幼稚園で実施した。また、小学校教諭による小学校音楽室での年長児対象の自己表現活動を行った。さらに、幼稚園教諭によるT2としての授業参加（生活科授業・音楽科授業）も行った。一方で、幼稚園年長児による1年生の授業参観、年長児と1年生の交流、年長児と2年生の交流を行い、接続期の子どもの異校種交流の充実を図った。

これらのことから明らかになったことは、以下である。幼稚園教諭と小学校教諭によって、①教材の捉え方、②教材を活かす環境構成、③教材を通して設定するねらいと内容について協議を行った結果、幼小接続期のカリキュラム開発には、ねらいや内容、活動や環境構成の背後にある教材観や幼児・児童観察等に関して、相互に理解することが重要であることがわかった（雑誌論文④）。また、④ねらいに応じた教師のかかわり、⑤教師による子どもの見方・捉え方、⑥ねらいと、活動の展開や学習スタイルとの関連等について、幼稚園・小学校の共通点、相違点を明らかにすることによって、幼小接続期の望ましい指導法に関して示唆を得ることができた（雑誌論文⑤）。研究の成果として、①幼小接続の

充実に向けて重要なことは、お互いの校種の文化の違いを認め、それを尊重し合うこと、②円滑な接続をめざすためには、それぞれの校種独自のねらいの設定の仕方、子ども個々や全体としての捉え方、活動の設定の仕方や評価の仕方を、子どもたちの発達や成長にふさわしい形で取り入れ合うことが必要であること、が挙げられる(学会発表②)。

一方、幼小接続カリキュラムで繋いでいく資質・能力は何かということに関して示唆を得るために、音楽科に焦点を当て、各国の音楽カリキュラムが、コンテンツベースであるのか、コンピテンシーベースであるのかについて分析した。その結果、国によって相違があることがわかった。また、コンピテンシーも、教科の本質に関わるコンピテンシーと汎用的コンピテンシーの両者に分けられることがわかった(雑誌論文②)。

幼小接続カリキュラム開発にあたり、まず各教科の基盤となる資質・能力を明らかにした。また、スタートカリキュラムに向けての準備として、小学校教諭が幼稚園の活動を観察し、どこに教科の芽生えがあるのかを探究した。それらを踏まえ、小学校教諭と幼稚園教諭が、幼稚園教育課程における各領域の活動の分析を通して、小学校の各教科の基盤となる資質・能力との関連を比較検討し、5歳児と小学校1年生を対象とした幼小接続カリキュラムを作成した。

これらの実践から明らかになったことは、①幼稚園教育は、小学校の準備教育ではない(小学校からの要求に答えるためだけの幼小接続ではない)、②バリアフリーの接続ではなく、「適切な段差」も必要である(子どもの意識改革)、③接続カリキュラムも重要であるが、幼稚園教諭と小学校教諭がお互いの異なる文化を尊重し、それぞれの教育の特徴を理解して、それを自分たちの教育に取り入れることが必須である(教員の意識改革)、④幼稚園では、遊びや生活の中で、クラス全体の共通の課題に粘り強く取り組む力・協同性・自己調整力などの資質・能力を育むことをめざすことが重要である、⑤小学校教諭との連携の積み重ねを通して、資質・能力をこれまで以上により意識して取り組んでいくことによって、子どもたちの発達や学びを幼小で繋ぐことが可能となる、⑥幼小接続の根幹となるのは、遊びに向かう力・学びに向かう力の連続性、等である(研究発表⑫)。

幼小接続カリキュラム実施の成果は、以下である。教諭の成果として、①次年度の1年生担任を早期に決定し、入学の3か月前から幼稚園を訪問して保育の様子を観察したり、子どもたちと関わりをもったりしたことで、子どもたちの実態をしっかりと把握した上で小学校生活をスタートさせることができたこと、②子どもたちの受け入れに向けて多くの準備をすることが可能となったこと、③算数科では、幼・小の教諭の連携により、幼児期の身近な事象や体験のなかに、数量や形

などの算数の概念に関わるものを見つけられたこと、④しっかり遊ばせたり、生活場面のなかで主体的に行動させたりする中で、子どもたちの探究心や好奇心を引き出し、それらをもとに「考える必要感」や「自分事として捉える」をキーワードに算数科の授業づくりを行うことができたこと、等が挙げられる。子どもたちの成果として、①事前の関わりによって小学校教諭を身近な存在として捉えていたため、教室を飛び出したり登校を嫌がったりすることなく、スムーズに小学校生活をスタートすることができたこと、子どもの様子から、学校生活に対する意欲を感じることができたこと、等が挙げられる。保護者を対象としたアンケートでは、「学校が楽しい」と感じている子どもは96.8%、「幼小接続を滑らかにするために、幼稚園・小学校が行っている取り組みは効果的である。」に対する保護者の肯定的回答は、95.6%と高い評価を得ており、「幼稚園から交流しているペアのお兄さんやお姉さんがいること、幼稚園で一緒に遊んだ小学校の先生がいることが安心である」、「さわやか班の先輩や地域の班の先輩たちによくしてもらいながら、彼らからいろいろ学ぶことができています」という意見が多かった。また、「接続期の学年の交流を密にすることで、幼児期→児童期がスムーズに移行できている」という意見もあった(研究発表⑩)。

次に、各教科や保育の各領域において、「めざす子ども像」「保育・教科の本質」、及び「通教科的能力と関連的に育む保育・教科の本質に根ざした資質・能力」を明らかにした。音楽科を一例として示す。

【音楽科でめざす子ども像】とは、音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情、生活や社会、伝統や文化などと関連付けながら創造していくことのできる子ども。【音楽科の本質】とは、「音や音楽を通して他者と関わること」「自己表現すること」「感性を働かせること」「美しいものへの感動を得ること」「多様性を認め合うこと。【通教科的能力と関連的に育む音楽科の本質に根ざした資質・能力】とは「①キャリアプランニング能力：音楽に対する感性を働かせ、他者と協働しながら音楽表現を生み出す中で、音楽による自己表現をしたり、音や音楽に対して自分なりの価値を考えたりすることができる。＜自己表現・価値の創造＞」「②人間関係形成・社会形成能力：音や音楽に対する気付きや感じたことを交流したり、仲間とともに音楽を創り上げたりする中で、多様な価値を認める柔軟な発想を持ち、共感したり一体感を味わったりすることができる。＜共有＞」「③課題対応能力：音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉えて考え、感性と知性を働かせながら、豊かな表現を追求することができる。＜追求＞」(研究発表⑳)

これらに基づき、学びの基盤となる通教科的な能力「キャリアプランニング能力」「人間関係形成・社会形成能力」「課題対応能力」を幼小接続期においてどのように培っていくのかに関して、幼児と児童を対象として、ブームワッカーを用いた音楽活動を行った。その結果、子どもたちが「生活や社会の中の音や音楽」にどのように向き合おうとするのかに関して、発達段階に応じた特徴が明らかとなった。個人や集団によって、音色を探求したり、鳴らし方・叩き方を工夫したり、即興的に音を組み合わせたり、協働で既習曲に合わせてリズム打ちをしたりすることは、「音や音楽に豊かに関わる」ことである。どうしたらもっと面白い音が出るのか、園内や音楽教室を動き回って探求する行動は、【課題対応能力】の「粘り強く取り組む力」「工夫する力」「様々な表現方法で表す力」に該当し、集団活動によって協働で遊びを発展させることは、【課題対応能力】の「力を合わせて取り組む力」に該当する。また、他者の表現の面白さに気付き、自らもそれを取り入れてチャレンジするという姿が見られた。これは、【人間関係形成・社会形成能力】の「自分の思いを伝えたり、相手の思いに気付いたりする力」「状況を判断する力」「相手にわかるように表したり、相手の表現を受け入れたりする力」に該当する（研究発表⑩、雑誌論文⑮）。以上のように、音楽活動が通教科的な能力とどう繋がるのかが具体的に明らかとなったことは研究成果といえる。

続いて、教科の資質・能力の育成の在り方の一例として音楽教育に関する研究報告を行う。まず、スペインのペラアントン校における、幼稚園・小学校を通した「子どもが育つ音楽教育」に関して研究を行い、音楽教育としての成果、人間教育としての成果を明らかにした（研究発表③、雑誌論文①）。また、音楽能力発達の先行研究や、実際の子どもの音楽活動の実態等から、音楽能力の発達至適時期を明らかにし（雑誌論文⑫）、優れた音楽教育法の事例から、それぞれの発達時期にふさわしい音楽指導法を明らかにした（雑誌論文⑧）。さらに、幼児と小学生を対象として、音高と音色を認識・識別する聴取力の発達に関する研究を行った（雑誌論文⑨）。一方、過去の優れた音楽教育の事例として、「ふしづくりの教育」の研究を行い、その特徴と成果を明らかにした（雑誌論文⑦⑩⑪⑬、学会発表①④⑤⑨⑩⑪）。これをもとに、幼稚園、小学校、特別支援学校において、「ふしづくりの教育」の実践を試みた（学会発表⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒）。以上のように、音楽科の資質・能力を育むために有効な指導法等に関する研究はかなり進んだが、それを実践に活かす研究はまだスタート段階であり、さらに時間をかけて実践研究を行い、有効性を検証することが今後の課題である。

5. 主な発表論文等

【雑誌論文】(計 16 件)

- ① 三村 真弓、吉富 功修、長澤 希、音楽科の資質・能力を育成する音楽遊びに関する研究－小学校音楽科授業におけるブームワッカーを用いた音楽活動を通して－、中国四国教育学会教育学研究紀要 (CD-ROM 版)、査読無、63、2018、73-78
- ② 吉富 功修、三村 真弓、岡山市立豊小学校における神尾一郎教諭の「ふしづくりの教育」の実践、中国四国教育学会教育学研究紀要 (CD-ROM 版)、査読無、63、2018、49-54
- ③ 三村 真弓、これからの音楽教育に求められるもの－音楽科における「深い学び」とは－、学校教育、査読無、No. 1201、2017、14-21
- ④ 三村 真弓、グローバル人材育成をめざした音楽科授業－音楽文化の違いや良さを味わう音楽科の授業づくり－、学校教育、査読無、No. 1201、2017、38-43
- ⑤ 三村 真弓、音楽性および音楽能力の発達至適時期と育成方法、子どもと発育発達、査読無、Vol. 15 No. 1、2017、64-70
- ⑥ 吉富 功修、三村 真弓、岡山県倉敷市立茶屋町小学校における「ふしづくりの教育」－明楽節夫教諭による第 5 学年の実践－、音楽文化教育学研究紀要、査読無、X XIX、2017、3-12
- ⑦ 三村 真弓、吉富 功修、長澤 希、聴取力の発達に関する研究－音高と音色に着目して－、教育学研究紀 (CD-ROM 版)、査読無、62、2017、660-665
- ⑧ 吉富 功修、三村 真弓、岡山県倉敷市立茶屋町小学校における「ふしづくりの教育」－昭和 52 年 11 月 15 日の音楽授業公開の第 4 学年の授業－、教育学研究紀要 (CD-ROM 版)、査読無、62、2017、280-285
- ⑨ 三村 真弓、子どもと音楽、子ども研究、査読無、7 巻、2016、3-10
- ⑩ 三村 真弓、吉富 功修、伊藤 真、別府 祐子、音楽能力テストに関する研究－聴取力と感受する力の関連性に着目して－、教育学研究紀要 (CD-ROM 版)、査読無、61、2016、602-607
- ⑪ 吉富 功修、三村 真弓、長澤 希、岡山県における「ふしづくりの教育」－倉敷市立茶屋町小学校第 1 学年の実践 (昭和 52 年)－、教育学研究紀要 (CD-ROM 版)、査読無、61、2016、608-613
- ⑫ 池田 明子、広兼 睦、掛 志穂、中山 芙充子、石井 信孝、松崎 伸一、長澤 希、石田 浩子、井上 弥、中村 和世、三村 真弓、幼小接続期におけるカリキュラムの開発－幼稚園教員による小学校授業への参加を通して－、学部・附属学校共同研究紀要、査読無、44 号、2016、177-183
- ⑬ 池田 明子、井上 弥、三村 真弓、幼小接続期におけるカリキュラム開発の基礎的研究－ねらい、教材、環境構成の視点から－、乳幼児教育学研究、査読有、24 巻、2016、59-66
- ⑭ 三村 真弓、伊藤 真、峯 恭子、松下 友紀、吉富 功修、井本 美穂、各国の音楽カリ

キュラムにおける鑑賞・聴取領域の内容に関する研究—コンテンツベース、コンピテンシーベースの視点を中心に—、音楽文化教育学研究紀要、査読無、XXVIII、2016、5-14

⑮ 吉富 功修、三村 真弓、伊藤 真、徳永 崇、わが国の音楽科における共通教材に関する研究—中学校音楽科における「モルダウ」を視点として—、音楽文化教育学研究紀要、査読無、XXVIII、2016、15-24

⑯ 三村 真弓、ラウラ・アスパウレヤ、カルメン・ナヘラ・ムルガデヤ、吉富 功修、伊藤 真、ジュゼプ・フェラン・ガリシア、子どもが育つ音楽教育（2）—ペラアントン校におけるヴィレムスの聴取力指導、及び即興ダンス—、音楽教育学、査読無、45 巻 2 号、2015、69-73

〔学会発表〕（計 28 件）

① 長澤 希、三村 真弓、幼小中 12 年間一貫教育における音楽カリキュラム—広島大学附属三原学校園の取り組み—、平成 29 年度日本音楽教育学会中国四国地区例会、2018 年 3 月 3 日、就実大学

② 吉富 功修、松下 友紀、三村 真弓、「ふしづくりの教育」に関する研究—古川小学校中家一郎校長（昭和 42 年 4 月～50 年 3 月）の従来の音楽教育に対する批判—特別支援教育・高等部重複障害学級における「ふしづくりの教育」の実践—、平成 29 年度日本音楽教育学会中国四国地区例会、2018 年 3 月 3 日、就実大学

③ 三村 真弓、長澤 希、吉富 功修、幼稚園における音遊びで育まれる汎用的資質・能力に関する研究—広島大学附属三原学校園の取組に着目して—、日本音楽教育学会第 48 回全国大会、2017 年 10 月 22 日、愛知教育大学

④ 吉富 功修、三村 真弓、「ふしづくりの教育」に関する研究（1）—広島市立戸坂小学校の中峯悠太教諭による第 3 学年の実践—、日本音楽教育学会第 48 回全国大会、2017 年 10 月 22 日、愛知教育大学

⑤ 三村 真弓、端山 文子、坂田 豊、掛 志穂、君岡 智央、中山 芙充子、広兼 睦、幼小中一貫教育における幼小接続カリキュラムの有効性に関する研究—広島大学附属三原学校園の取組—、平成 29 年度日本教育大学協会研究集会、2017 年 10 月 14 日、刈谷市総合文化センター（アイリス）

⑥ 吉富 功修、三村 真弓、藤原 志帆、「ふしづくりの教育」の実践（3）—特別支援教育における実践を中心として—、日本教科教育学会第 43 回全国大会、2017 年 9 月 10 日、北海道教育大学札幌校

⑦ 吉富 功修、三村 真弓、長澤 希、就学前教育での「ふしづくりの教育」の実践—広島大学附属三原幼稚園における実践を中心として—、国際幼児教育学会第 38 回大会（国際学会）、2017 年 9 月 2 日、国立臺北教育大學

⑧ 吉富 功修、三村 真弓、福島 さやか、「ふしづくりの教育」の実践（2）—福岡県春日市泉ヶ丘幼稚園における実践を中心として—、音楽学習学会第 13 回研究発表大会、2017 年 8 月 5 日、埼玉大学

⑨ 三村 真弓、新領域「希望（のぞみ）」と道徳教育—広島大学附属三原学校園の取組—、「道徳教育の抜本的改善・充実に係る支援事業」（文部科学省採択）道徳教育の授業力向上シンポジウム（招待講演）、2017 年 3 月 5 日、広島大学東千田未来創世センター

⑩ 三村 真弓、汎用的資質・能力の基礎をばくむ幼小接続期カリキュラムの開発—異校種教員同士の意識改革を進める学校園経営の在り方—、平成 28 年度中国地区国公立幼稚園・こども園連盟教育研究大会、2016 年 10 月 28 日、赤磐市立中央公民館

⑪ 三村 真弓、吉富 功修、岐阜県下羽栗小学校における「ふしづくりをとりいれた音楽教育」—ひとりだちのできる 学習指導をめざして—、日本音楽教育学会第 47 回大会、2016 年 10 月 8 日、横浜国立大学

⑫ 吉富 功修、三村 真弓、「ふしづくりの教育」の授業研究—第 2 学年・田中千鶴教諭の授業を対象として—、日本音楽教育学会第 47 回大会、2016 年 10 月 8 日、横浜国立大学

⑬ 吉富 功修、三村 真弓、「ふしづくりの教育」の授業研究—高山市立西小学校第 5 学年・長尾教諭の授業を対象として—、音楽学習学会第 12 回研究発表大会、2016 年 8 月 25 日、九州女子大学

⑭ Mayumi MIMURA、Shin ITO、Sachiko KITANO、Ryo HASAGAWA、Katsunobu YOSHITOMI、Aya Yamanaka，“The Kindergarten to Elementary School Transition Curriculum of Hiroshima Univ. Laboratory Schools, Mihara : Focusing on building generic capacities and attitudes.” The 17th PECERA Annual Conference（国際学会）、2016 年 7 月 7 日、タイ・チュラロンコン大学

⑮ 三村 真弓、音楽能力発達の至適時期、日本発育発達学会（招待講演）、2016 年 3 月 6 日、神戸大学

⑯ 池田 明子、井上 弥、三村 真弓、幼小接続期におけるカリキュラムの開発—小学校授業参加において幼稚園教員が認識した共通点・差異点に着目して—、日本乳幼児教育学会、2015 年 11 月 29 日、昭和女子大学

⑰ 吉富 功修、三村 真弓、伊藤 真、八木 正一、長澤 希、岡山県における「ふしづくりの教育」—倉敷市立茶屋町小学校での第 5 学年の実践を中心として—、日本教科教育学会第 41 回全国大会、2015 年 10 月 25 日、広島大学

⑱ 吉富 功修、三村 真弓、八木 正一、長澤 希、岡山県倉敷市立茶屋町小学校における「ふしづくりの教育」—第 1 学年の実践（昭和 52 年）—、日本音楽教育学会第 46 回大会、2015 年 10 月 3 日、フェニックス・シーガイア・リゾート

⑱ JOSEP FERRAN, LAURA ESPAULELLA, ANNA FARRES, MAYUIMI MIMURA, KATSUNOBU YOSHITOMI, MIHO IMOTO, SHIN ITO, “Interdisciplinary project: “Alfresco Concert” – Primary research in the Pereanton school of Granollers; Catalonia”, EECERA ANNUAL CONFERENCE (国際学会), 2015年9月8日, バルセロナ自治大学

⑳ 三村真弓、広島大学附属三原学校園の幼小中 12 一貫教育ー幼小接続期教育の充実を中心にー、第 48 回全国国立大学附属学校連盟校園長会研究会 平成 27 年度日本教育大学協会附属学校連絡協議会校園長分科会、2015 年 8 月 21 日、三井ガーデンホテル千葉

㉑ 吉富 功修、八木 正一、三村 真弓、伊藤 真、長澤 希、岡山県における「ふしづくりの教育」(1)ー岡山県倉敷市立茶屋町小学校における実践 (1)ー」音楽学習学会第 11 回研究発表大会、2015 年 7 月 18 日、茨城大学

〔図書〕(計 1 件)

① 吉富 功修、三村 真弓 他 29 名、ふくろう出版、小学校音楽科教育法ー学力の構築をめざしてー、2017、242

〔産業財産権〕

○出願状況 (計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

三村 真弓 (MIMURA, Mayumi)
広島大学・大学院教育学研究科・教授
研究者番号：00372764

(2) 研究分担者

吉富 巧修 (YOSHITOMI, Katsunobu)
広島大学・大学院教育学研究科・名誉教授
研究者番号：20083389

伊藤 真 (ITO, Shin)
広島大学・大学院教育学研究科・准教授
研究者番号：70455046

北野 幸子 (KITANO, Sachiko)
神戸大学・大学院人間発達環境学研究科・准教授
研究者番号：90309667

山中文 (YAMANAKA, Aya)
椋山女学園大学・教育学部・教授
研究者番号：10210494

(3) 連携研究者

朝倉 淳 (ASAKURA, Atsushi)
広島大学・大学院教育学研究科・教授
研究者番号：70304384

大後戸 一樹 (OOSEDO, Kazuki)
広島大学・大学院教育学研究科・准教授
研究者番号：20632821

田中 宏幸 (TANAKA, Hiroyuki)
安田女子大学・教育学部・教授
研究者番号：40278966

中村 和世 (NAKAMURA, Kazuyo)
広島大学・大学院教育学研究科・教授
研究者番号：20363004

松浦 武人 (MATSUURA, Taketo)
広島大学・大学院教育学研究科・教授
研究者番号：70457274

(4) 研究協力者

池田 明子 (IKEDA, Akiko)

長澤 希 (NAGASAWA, Nozomi)

石井 信孝 (ISHII, Nobutaka)

掛 志穂 (KAKE, Shiho)

君岡 智央 (KIMIOKA, Tomochika)

坂田 豊 (SAKATA, Yutaka)

中山 芙充子 (NAKAYAMA, Fumiko)

端山 文子 (HAYAMA, Fumiko)

広兼 睦 (HIROKANE, Mutsumi)

松崎 伸一 (MATSUZAKI, Shinichi)